

叫びの臨床心理

—叫びの行為と大声を出す行為の背景にある感情—

川 口 めぐみ

Clinical psychology of shouting
:Emotional underpinnings of the behavior of shouting

Megumi Kawaguchi

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別冊

平成 30 年 2 月 28 日 発行

叫びの臨床心理

—叫びの行為と大声を出す行為の背景にある感情—

Clinical psychology of shouting

: Emotional underpinnings of the behavior of shouting

川口 めぐみ

Megumi Kawaguchi

問 題

憧れの人を目の前にしたとき、試合で戦う仲間を応援するとき、相手に強い怒りや悲しみをぶつけようとするとき、衝撃的な出来事に遭遇したとき、人は大きな声で叫び感情を表出することがある。叫びの行為は日常的な行為であるとは言い難く、もし目の前に叫んでいる人がいたとしたら、多くの人の注意が叫びの行為者に切り替わるだろう。叫びの行為の誘目性は非常に高く、その大きな声と破壊的な音声は遠くにいる人をも巻き込み、その後の行動を変更させるかもしれない。

精神分析や心理臨床研究では、認知症患者やてんかん患者らの身体的症状のひとつとして叫びの行為が示されている¹⁾⁴⁾。また、こどもの問題行動のひとつとして叫びの行為が挙げられているものもある⁵⁾。さらに、日本脳卒中学会による「日本脳卒中学会・脳卒中感情障害(うつ・情動障害) スケール Japan Stroke Scale (Emotion Disturbance Scale)」では⁶⁾、情動

障害の評価スケール 8 評項目のうちのひとつである「脱抑制行動(易怒性, 性的逸脱行動)」項目内の「異常で明らかな怒りや逸脱行為が見られる」において叫ぶ行為が挙げられている。このように、叫びの行為は不適応もしくは逸脱した行為のひとつとして取り上げられており、症状として叫びを扱う研究は非常に多くみられる。しかしながら、人はなぜ叫ぶのか、叫びとは何か等、叫びと感情の関連について直接検討した先行研究は少なく、叫びにはどのような感情が存在しているのか、そのプロセスについてもわかっていないことが多い⁷⁾。このことから、本研究では、どのようなときに人は叫びたくなるのか、叫びと感情の関連について明らかにすることを目的に検討を行う。先行研究においては、叫びではなく大声を出すという言葉で説明したのもも多く存在する。このことから、叫び行為と大声を出す行為の背景に存在する感情の違いを明らかにしながら、叫び行為と感情の関連について明らかにしていく。

Table 1
KH coderによる頻出語の結果

叫びたくなるとき(2回以上の頻出語)

頻出語	回数	頻出語	回数	頻出語	回数
する(動詞)	38	重なる(動詞)	4	感じる(動詞)	2
イライラ(副詞)	34	自分(名詞)	3	切羽詰まる(動詞)	2
ストレス(名詞)	18	嫌(形容動詞)	3	楽しい(形容詞)	2
溜まる(動詞)	18	ない(否定助動詞)	3	悲しい(形容詞)	2
むかつく(動詞)	5	前(副詞可能)	3	どうにも(副詞)	2
色々(形容動詞)	4	限界(名詞)	2	もやもや(副詞)	2

大声を出したくなるとき(2回以上の頻出語)

頻出語	回数	頻出語	回数	頻出語	回数
する(動詞)	30	遠く(副詞可能)	4	興奮(サ変名詞)	2
イライラ(副詞)	17	すっきり(副詞)	4	色々(形容動詞)	2
楽しい(形容詞)	15	もやもや(副詞)	4	歌う(動詞)	2
ストレス(名詞)	6	人(名詞)	4	重なる(動詞)	2
溜まる(動詞)	6	疲れる(動詞)	3	伝える(動詞)	2
嬉しい(形容詞)	5	なる(動詞)	3	できる(動詞)	2
怒る(動詞)	5	むかつく(動詞)	3	いい(形容詞)	2
ない(否定動詞)	5	気分(名詞)	2		
呼ぶ(動詞)	4	応援(サ変名詞)	2		

方法

参加者

短期大学に通う 19 歳から 23 歳(平均年齢 = 19.85 ± 5.52 歳)までの学生 103 名を対象に調査を行った。調査実施時、103 名全員精神疾患等で通院した既往歴はなかった。調査は研究倫理規程に則り、授業が開始される前に行われ、授業とは無関係であること、回答内容は個人が特定されないこと、得られたデータは統計的に処理され、参加は任意であることを説明し、了承を得た者のみ調査に参加した。

質問紙

どのようなときに叫びたくなるか、どのようなときに大声を出したくなるかの 2 項目について自由記述欄を設け、最もあてはまる内容を自由に記述するよう教示した。また、叫び行為/大声を出す行為への欲求(6. とてもある~1. 全くない)、叫び行為/大声を出す行為をとることの容易さ(6. とても容易~1. 全く容易ではない)、叫び行為/大声を出す行為に対する恥感情(6. とても恥ずかしい~1. 全く恥ずかしくない)について 6 段階評定するよう教示した。

回答時間に制限はなく、質問項目の提示順序はカウンターバランスをとった。

分析方法

得られた自由記述データは、計量テキスト分析やテキストマイニングのためのフリーソフトウェアである KH Coder version 2.00⁸⁾ を用いて分析した。この分析手法によって、回答に特徴的な重要語や出現頻度の高い語を抽出することができる。表記方法が異なれば別の語として抽出されるため、いらいら・イライラのように平仮名や片仮名、漢字表記は同一語として抽

出されるようコーディングルールを作成した。

叫び行為／大声を出す行為に対する欲求、容易性、恥感情について得られたデータは、統計解析言語 R version i386 3.4.1 を使用し二要因分散分析を行った。

結果

どのようなときに叫びたくなるか、どのようなときに大声を出したくなるのかそれぞれについて自由記述で得られた頻出語（頻出 2 回以上）を Table 1 に示す。叫びの行為において最

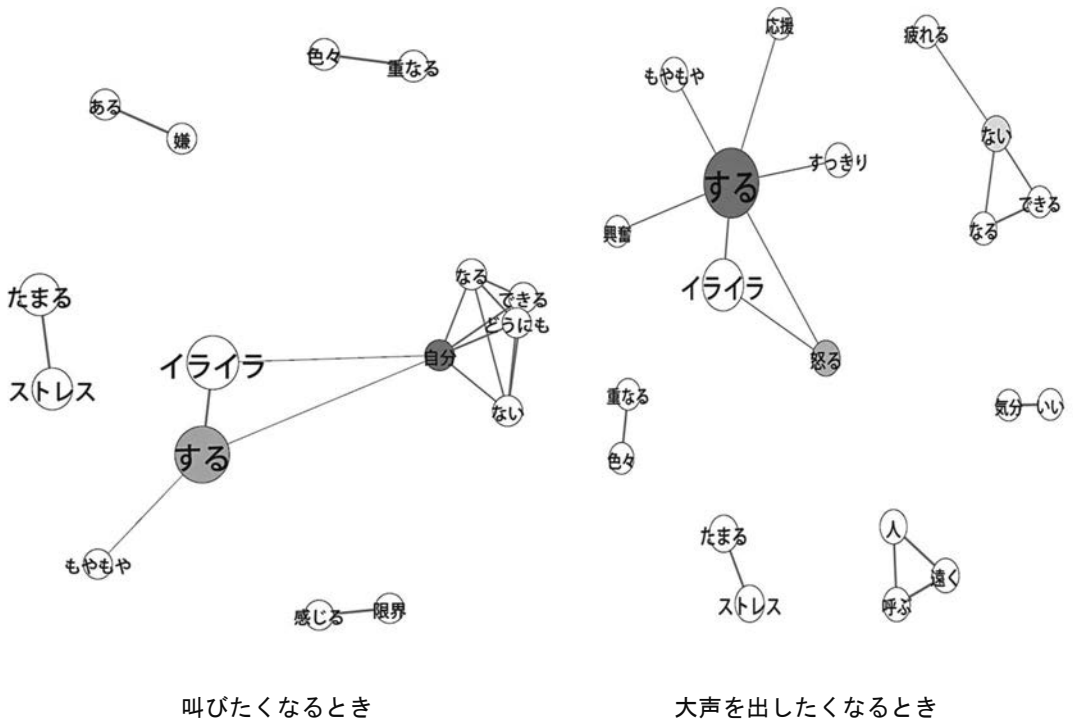


Figure 1. 叫びたくなるとき／大声を出したくなるときの背景にある感情状態の共起ネットワーク(中心性媒介)

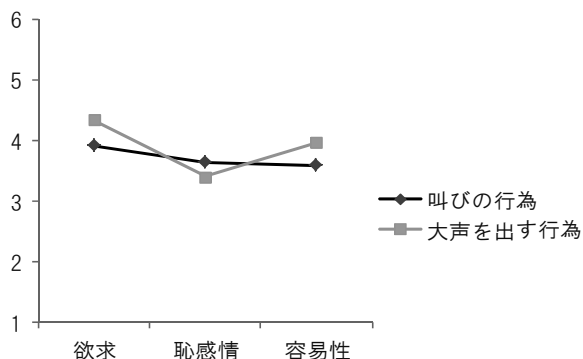


Figure 2. 叫び行為と大声を出す行為に対する認識の平均値

も多く出現した語は「する」が 38 回で、「イライラ」(34 回)、「ストレス」(18 回)、「溜まる」(18 回)、「むかつく」(5 回)が続いた。2 回以上出現している語のうちポジティブ語(「楽しい」2 回)の出現割合は全体の 1.4%であった。

大声を出す行為について最も多く出現した語も「する」(30 回)で、「イライラ」(17 回)、「楽しい」(15 回)、「ストレス」「溜まる」(6 回)、「嬉しい」「怒る」(5 回)が続いた。2 回以上出現している語のうちポジティブ語(「楽しい」(15 回)、「嬉しい」(5 回)、「すっきり」(4 回))の出現割合は全体の 19.1%であった。

語と語のつながりを共起ネットワークで示す (Figure 1)。叫びたくなるときの背景として、限界を感じているときやどうにもならないとき、苛立ちや何らかのストレスが生じているときなど、ネガティブ感情のネットワークが多く形成されている。大声を出したくなるときの背景においても叫びのネットワークと同様、色々な状況が重なったときやストレスが溜まったとき、イライラ感情やもやもやとした感情が生じているときを示すネットワークが形成されている。

しかしながら、大声を出したくなるときにのみ、誰かを呼ぶためや応援するための手段、気分がよいときをつなぐネットワークが形成された。

叫び行為/大声を出す行為への欲求や容易性、恥感情について 6 段階評価してもらった結果を Figure 2 に示す。分析の結果、叫び行為/大声を出す行為の主効果、行為への欲求、恥感情、容易性の主効果が有意で ($F(1, 102) = 5.514, p < .05$, $F(2, 204) = 11.518, p < .001$)、交互作用が有意であった ($F(2, 204) = 3.633, p < .05$)。

考察

叫びと感情の関連について明らかにするため、叫びと同義で使われる大声についても取り上げ、どのような状況にあるとき、人は叫びや大声を出したくなるのか青年期を対象に検討を行った。結果、叫びと大声を出す行為の背景になる感情状態は共通した点があり、イライラした状態やストレスを感じているとき、人は叫びや大声を出したくなることが明らかとなった。特に、叫びの行為にはネガティブ感情との関連が強く、消化していかなければならないタスクが複数あ

る状況に置かれたとき、自分ではどうしようもできず限界を感じたとき、人は叫びたくなる傾向が示された。一方、大声を出す行為には、遠くにいる人を呼び止めるための手段としてのみならず、仲間を応援するなど対人関係を維持するためのポジティブな行為として機能している側面があることが示され、このことから、大声を出したくなるときの感情状態は状況によって異なるが、叫びたくなるときの感情状態は精神的負担が非常に大きく、自分の中だけでは解決できそうもない状況であるとき、人は叫びたくなるのかもしれない。青年期を対象とした結果では、大声を出す行為は叫びの行為よりも比較的容易で、日常的な行為である可能性も示された。このことから、叫びの行為と大声を出す行為は同一カテゴリとして用いることは妥当ではなく、叫びの行為の背景にある感情状態や動機の評価は慎重に行う必要があることを示唆する。

柴崎は⁹⁾ 認知的リハビリ患者に対し、自分自身が発声している叫び声に長時間さらされることや、叫び声を出すよう積極的に促すことによって、長期的には症状の軽減につながり、この行為を積極的に行った患者は経過として身体的及び機能的効果がみられることを示している。また、片岡・福岡・菅・大西・角藤¹⁰⁾ は、精神科病棟の患者の叫びをストレスフルと関連させながら、叫びには多様な心理が存在していること、叫びはその感情表出のひとつであることから、叫びの欲求に対する看護的ケアの必要性を示唆している。見通しを立てることが困難だと感じたとき、ネガティブな感情を自分自身でコントロールできないとき、それでも我々は何と

か適応しよう努力する。その手段のひとつとして叫びの行為があり、叫びの行為が時として精神的安定を図っているのかもしれない。本研究結果から、叫びという行為の背景にある感情を探ることは、臨床場面や人理解、感情理解につながる重要な観点であることを示唆する。

文献

- 1) 井関栄三: レビー小体型認知症の精神症状・神経症状、精神医学、49, 691-697, 2007.
- 2) 貝谷久宣: 非定型うつ病—不安障害との併発をめぐって、精神医学、52, 840-852, 2010.
- 3) 大島千佳・伊藤直樹・西本一志・細井尚人・安田 清・中山功一: 認知症患者の常同言語や発声に伴奏づけして患者の感情を静穏化するシステムの提案、インタラクティブ2011 論文集 (情報処理学会シンポジウムシリーズ)、3, 625-628, 2011.
- 4) 佐々木智之: 強度行動障害のある子どもの幼児期の対応について、作業療法ジャーナル、50, 1182-1185, 2016.
- 5) 高橋 晃・下平弥生・井上美由紀・松田幸恵・齋藤絵美・宮崎 眞: 自閉症児に対するコミュニケーション・会話指導などの実践研究3 教育現場における行動問題に対する応用行動分析学のアプローチ、岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、13, 165-177, 2014.
- 6) 日本脳卒中学会・脳卒中感情障害(うつ・情動障害)スケール Japan Stroke Scale (Emotional Disturbance Scale)、脳卒中、

- 25, 205-214, 2003.
- 7) Arnal, L. H., Flinker, A., Kleinschmidt, A., Giraud, A. L., & Poeppel, D. : Human screams occupy a privileged niche in the communication soundscape. *Current Biology*, 25, 2051-2056, 2015.
- 8) 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析内容分析の警鐘と発展を目指して、ナカニシヤ出版、2014.
- テーション、明星大学心理学年報、 30, 23-40, 2012.
- 10) 片岡かおり・福岡眞須子・菅ゆかり・大西宏・角藤豊子: 精神科病棟における患者の「叫びたい欲求」、日本精神科看護学会誌、49, 143-147, 2006.
- 9) 柴崎光世: 前頭葉機能障害の認知リハビリ